

## 1. はじめに

米沢出身の郷土史家、伊佐早謙(1858～1930：安政4～昭和5年)が著した『新編最上義光事歴』が最上義光に関する最初期の史料集であることが当館の伊佐早関連資料調査がきっかけとなってわかった。これに関連して、2017年12月21日の学長定例記者会見で再発見のプレス発表と、資料公開を同12月20日(水)から2018年1月30日(火)まで常設展示室歴史コーナーにて行った。

## 2. 『新編最上義光事歴』とは

本資料は、「長井政太郎収集文書」(当館発行『古文書近世史料目録第14号』34頁)に所収されている。概要は以下の通りである。

資料名・目録資料番号	寸法(cm)	ページ数	刊・写
『最上義光事歴 上』・11-5	28.5×20.5	141	写本
『最上義光事歴 中』・11-6	28.5×20.5	148	写本
『最上義光事歴 下』・11-7	28.5×20.5	165	写本

目録では資料名を「最上義光事歴」で統一しているが、『最上義光事歴 下』は実際には『新編最上義光事歴 三』である。しかし、内題は三冊全て「新編最上義光事歴」と書かれている。

資料には長井政太郎(1905～1983)の蔵書印「長井蔵書」と「山形大学蔵書」の朱印、山形大学が受入れた時の「山形大学附属図書館 本館 63.12.27」の青印が押されている。その他、図書館による資料整理シール、整理用貼紙が各1枚貼られている。

長井は1958年に当館初代館長に就任、後に本学教育学部(現地域教育文化学部)の学部長を務めた。地理学を専門とし、県内各地の古文書を収集している。本資料の入手について詳細は不明だが、長井が県内の古文書を収集したおりに林泉文庫の原本を写して所有していたものとみられる。同目録には他にも伊佐早謙関連の資料が見られ、長井が伊佐早の蔵書や林泉文庫に着目していたことが分かる。

内容は、最上義光が家督を継いだ1570(永禄13・元亀元)年、義光の立石寺への立願からはじまり、1622(元和8)年に改易された時から、1631(寛永8)年に義俊(義光の孫)が26歳で死去し、義智(義俊の嫡子)が後嗣するところまでを記述し、編年体で関係資料を網羅している。年次毎に、関係する記録、覚書、系図、軍記物、古文書等を収載し、年次の末尾に「按」として、伊佐早の按語(考察)を入れている。

伊佐早がまとめた最上義光についての史料集として『最上義光事歴』(1913(大正2)年以前に成立)、『最上義光公略伝』(1913年発行)、『新編最上義光事歴』がある。最初の『最上義光事歴』については現在所在不明ながら、『最上義光公略伝』の最上義光公三百年記念市祭協賛会による「編纂の趣旨」の中で、「(前略)本会は本市祭協賛行事の一として、公の事蹟を編纂し、之を世に公にし、公の事蹟を長く後昆に伝ふることとせり、是れ山形市今日あるの基を開きたる公を追憶する



『新編最上義光事歴』展示の様子

の一端に供せんか為めなり、依てこれか編纂を、山形市教育会に委嘱せしに、同会は、此際急遽稿を起し、苟且これに充てんよりは、寧ろ之を米沢の碩儒にして、曩に奥羽編年史料、及び最上義光事歴等を編述せる史家、伊佐早謙氏に委嘱するの捷徑にして且つ妥当なるに如かすとなし、同会より、氏に委嘱するに公の略伝を以てせしに、氏は之を快諾せられ、忙中旬余の日時を割き、之を撰述せられたるもの即ち此書なり、今若し事歴を以て公の詳伝とせば、本書は其の小伝となすへきか、(後略)」とあり、伊佐早に執筆を依頼した経緯が詳しく書かれている。おそらくその後、この二書を基にさらに加筆して作られたのが『新編最上義光事歴』と推定される。

### 3. まとめ

『最上義光事歴』と『新編最上義光事歴』はいずれも未刊行で、現在ではその存在すら忘れ去られてきたが、約百年前の最上義光研究の実証的に高いレベルを窺うことができ、研究史上重要な意義がある。また、現在でもなかなか見ることができない義光に係る記録・覚書・古文書等の資料をほぼ網羅しており、編年史料集としての価値がある。しかし、伊佐早が引用した記述と原文書との比較や年次比定、本資料が写本である性格上、他に存在するであろう『最上義光事歴』・『新編最上義光事歴』との比較が必要である。今後これら の所在調査と、引用・参考にした著作物についての情報収集を課題としたい。

### 参考文献

栗野俊之『最上義光』(日本史史料研究会研究選書13) 日本史史料研究会企画部 (2017)

伊藤清郎『最上義光』吉川弘文館 (2016)

岩本篤志編『米沢藩興譲館書目集成 第四巻 林泉文庫書目 解題・解説』(書誌書目シリーズ9) 朝倉治彦監修, 株式会社ゆまに書房 (2009)

竹井英文『最上義光』(シリーズ・織豊大名の研究 第六巻) 戎光祥出版株式会社 (2017)

誉田慶恩『奥羽の驍将 - 最上義光 -』(日本の武将 60) 株式会社人物往来社 (1967)

『最上義光公略伝』最上義光公三百年記念市祭協賛會 (1913)

『最上義光公三百年祭誌』最上義光公三百年記念市祭協賛會 (1914)

### 付記

なお、本報告をまとめるにあたっては、伊藤清郎山形大学名誉教授より御教示を賜りました。ここに記して、厚く御礼申し上げます。